

2017 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

生物が体験しているのは、その生物とは独立な客観的「環境 (Umgebung)」ではなく、生物が行為と知覚の連関として自らつくりあげた「環世界 (Umwelt)」である。生物を機械的な客体とみなす行動主義がリユウセイを極めた時代に、生物を一つの主体とみなしてこのように論じたのはドイツの生物学者フォン・ユクスキュル (一八六四―一九四四) だ。

その著書『生物から見た世界』の冒頭で、ユクスキュルはマダニの環世界を描写している。マダニにとって生物学的に意味を持つのは、周囲からやってくる膨大な情報のうち、ごく一部分だけである。交尾を終えた雌のマダニは灌木の枝先で動物を待つ。そこに哺乳類の皮膚から⁽²⁾「プリンピツ」される⁽²⁾酪酸の匂いが漂ってくると、一か八かで身を投げる。無事⁽³⁾「エモノ」の上に着地すると、今度は嗅覚の代わりに熱をたよりに動き出す。なるべく毛のない温かな場所を探し、そこで動物の皮膚の中へと潜り込むのだ。

酪酸の匂い、動物の皮膚の感触と温度、そしてこれらの刺激に⁽⁴⁾「クドウ」されてのいくつかの単純な行為。これがマダニの環世界のすべてである。それ以外の環境の膨大な情報や行為の可能性は、マダニにとっては無意味であるどころか、そもそも存在しないも同然だ。

『生物から見た世界』の終盤に「魔術的環世界」と題された章がある。その冒頭に、ある少女の話が登場する。

その少女はマッチ箱とマッチで、お菓子の家やヘンゼルとグレーテルと魔女の話をしながら一人で静かに遊んでいる。すると突然、「魔女なんかどこかへ連れていっちゃって！ こんなこわい顔もう見ていられない」と叫び出す。この話を紹介しながらユクスキュルは「少なくともこの少女の環世界には悪い魔女がありありと現れていたのだ」とコメントしている。

この少女の環世界には明らかに、彼女の想像力が介入している。ダニの比較的単純な環世界とは違い、彼女の環世界は外的刺激に帰着できない要素を持っている。それをユクスキュルは「魔術的環世界」と呼んだ。

この「魔術的環世界」こそ、人が経験する「風景」である。

人はみな、「風景」の中を生きている。それは、客観的な環境世界についての正確な視覚像ではなくて、進化を通して獲得さ

れた知覚と行為の連関をベースに、知識や想像力といった「主体にしかアクセスできない」要素が混入しながら立ち上がる実感である。何を知っているか、どのように世界を理解しているか、あるいは何を想像しているかが、風景の現れ方を左右する。

「風景」は、どこから与えられるものではなくて、絶えずその時、その場に生成するものなのだ。環世界が長い進化の来歴の中に成り立つものであるのと同様に、風景もまた、その人の背負う生物としての来歴と、その人生の時間の蓄積の中で、環境世界と協調しながら生み出されていくものである。

そうして私たちは、いつでも魔術化された世界の中を生きている。いや、⁽⁵⁾絶えず世界を魔術化しながら生きている、と言った方が正確だろうか。

生き物は、ただ生きているだけで、次々と困難に出会う。まったく想定外の、想像もしない新たな課題にぶつかるともある。そんなときにも生物は、自分の手持ちの道具と身体で、何とかやりくりをしてきた。

指を使って数えるのもそうである。指はもともと、モノを掴むために使われてきたのであって、数えるための器官ではない。実際、人間の長い進化の来歴の中で、「数える」必要に迫られることはごく最近までなかっただろう。だからこそ、いざその必要に迫られたときには、それまでモノを掴むために使っていた指を「転用」するほかなかったのだ。あくまでその場凌ぎの方法だから、これにもしわよせがある。

普通に指を使って数えると、十までしか数えることができない。だから、「十」が数えるときの単位として定着した。無限にある数の中で、「十」が特別扱いされなければならない数学的な理由など、どこにもないのである。

実際、コンピュータの中で数字は、二進法で表現される。何と言っても、二つの記号だけですべての数を表せるのが魅力である。その点、二進法は十進法よりもはるかにエレガントだが、⁽⁶⁾世界中の大部分の人は十進法を使う。

道具というのは、無闇に作れるものではないのである。それが効果的に機能するためには、人間の身体に寄り添う必要がある。はさみの持ち手は、指が通りやすく力が伝わりやすいように、人間の身体の特徴な条件にうまく適合すべく作られる。そうして道具は、大なり小なり、使用者である人間の姿を、その構造の中に反映していくのだ。

数学で使われる様々な道具にも、よく見ると人間が映り込んでいる。たとえば「数直線」という概念がある。0を中心として一直線上に、右に向かって正の数、左に向かって負の数が順番に並ぶという、数の世界の幾何学的な描像である。

離散的な数と、連続的な直線を一つに融合してしまうのだから、考えてみれば大胆な発想だ。そもそも「数」と幾何学的な「位置」は、概念としては別物である。それを一緒くたにしてしまうのだ。

こんな大胆さにもかかわらず、ちゃんと教えれば小学生でも数直線を理解できる。それはなぜかと言えば、数と直線を結びつけてしまう衝動が、初めから人間の中にあるからである。人間の脳の中では、数と位置とが極めて近い関係にある。だからこそ、数字の世界を直線として想像することが自然に感じられるのだ。

ところで、私は脳科学的な知見を引くことで、すべてを脳の話に還元するつもりは毫ちよもない。私たちの経験している世界のすべてが、脳によって生み出されていると考えるのは誤りだろう。脳は私たちが経験する世界の唯一の原因ではない。

そもそも脳の第一の働きは、生きるための有効な行為を生み出すことにある。その最も大切な仕事は、効果的な行為を生成するために、環境世界と身体を仲介することだ。そうして生み出される様々な行為の繰り返しがまた、逆に少しずつ私たちの脳を形作っていく。脳は、(7)。その脳だけを環境世界や身体的な行為の文脈から切り離し、そこにだけ特権的な地位を与えるのが賢明とは思えない。くだいようだが、私が強調したいのは、次の点である。

数学的思考は、あらゆる思考がそうであるように、身体や社会、さらには生物としての進化の来歴といった、大きな時空間の広がりや舞台として生起する。脳内を見ている、あるいは肉体の中だけを見ている、そこに数学はないのだ。

「わかる」という経験は、脳の中、あるいは肉体の内よりもはるかに広い場所で生起する。にもかかわらず、自然科学が理性をことさらに強調して、心的過程のすべてを脳内の物質現象に還元しようとする中で「人の心は狭い所に閉じ込められてしまっている」。岡潔は、このように嘆いた。

この身体、この感情、この意欲といえは本来はすむところを人はなぜか、自分のこの身体、自分のこの感情、自分のこの意欲と言わずにはいられない。ところが数学を通して何かを本当にならうとするときには、「自分の」という意識が障害になる。

むしろ「自分の」という限定を消すところが、本当に何かを「わかる」ための条件ですらある。

「わかる」という経験の本来の深さを直截ちよくせつに示す例として、岡潔はしばしば「他の悲しみがわかる」ことについて書いている。

他の悲しみがわかるということは、他の悲しみの情に自分も染まることである。悲しくない自分が悲しい誰かの気持ちを推し量り、「理解」するのではない。本当に他の悲しみがわかるということは、自分もすっかり悲しくなることである。「他の」悲しみ、「自分の」悲しみという限定を超えて、端的な「この悲しみ」になりきることだ。「理で解る」のではなく、情がそれと同化してしまふことである。

私たちは本来、生まれつき他者と共感する強い能力を持っている。一九九六年にイタリアのジャコモ・リゾラッティらがサルの実験で「ミラーニューロン」を発見して話題を呼んだ。サルがたとえば何かものを持ち上げる動作をすると、それに伴って脳の一部分が活動をする。ところが驚くべきことに、その同じ脳の部位の一部分が、他のサルが何かを持ち上げる動作を見ているだけでも活動するのだ。自分が運動をしているときだけでなく、他者の運動を見ているときにも、その運動をさも自分がしているかのように脳が活動するのである。このように、他者の運動を模倣 (mirror) する機構が脳の中にあることを、彼らは明らかにした。

ミラーニューロンに関連して、ラマチャンドランという脳科学者が大変興味深い実験を遂行した。ミラーニューロンは実は、他者の運動だけでなく、他者の「痛み」をも模倣する。たとえば、目の前の人の手が金槌かまづちで思い切り叩かれるところを見たら、こちらまで思わず手を引っ込めてしまおうだろう。目の前の人の「痛い！」という感覚を、見ているこちら側のミラーニューロンがコピーしてしまうからだ。それで思わずこちらも手を引っ込める。が、もちろん、本当に痛いわけではない。

ラマチャンドランはここに着目した。ミラーニューロンは、他者の運動や感覚を模倣する。他人が痛がっているときに、自分が痛いときに活動する脳の部位の一部分が発火している。ならばなぜ、こちらは本当に痛くならないのだろうか。

ラマチャンドランは、手の皮膚や関節にある受容体から「私は触れられていない」という無効信号が出て、ミラーニューロン

からの信号が意識にのぼるのを阻止しているのではないか、と推測し、アイディアを検証するためにハンフリーという、湾岸戦争で片腕を失った幻肢患者に協力を依頼した。

幻肢患者は一般に、腕がないにもかかわらず、まだそこに腕があるという幻想を抱いている。ハンフリーの場合は戦争で腕を失っていたのに、顔を触れられるたびに、失った手の感覚を感じていた。

ラマチャンドランはそんなハンフリーに、ジュリーという別の学生を見てもらいながら、ジュリーの手をなでたり叩いたりしてみせた。すると、ハンフリーは驚いた様子で、ジュリーの手がされていることを自分の幻肢に感じる、と叫んだ。

ラマチャンドランの予想通りの結果だった。

ラマチャンドラン自身が「獲得性過共感」と名付けたこの現象は、幻肢患者でなくても、健常者の腕に麻酔を打つだけでも再現できることがわかった。麻酔によって、皮膚からの感覚入力をシャダンすると、誰もが文字通り、目の前の人と痛みを共有してしまうようになる。

「あなたの意識と別のだれかの意識をへだてている唯一のものは、あなたの皮膚かもしれないのだ！」とラマチャンドランは印象的な言葉でこの実験の報告を締めくくっている。

この実験は、私たちの心がいかに他者と通い合い、共感しやすいものであるかをまざまざと示している。脳の中に閉じ込められた心があつて、それが環境に漏れ出すのではなくて、むしろ身体、環境を横断する大きな心がまずあつて、それが後から仮想的に「小さな私」へと限定されていくと考えるべきなのではないだろうか。

(森田真生『数学する身体』による)

注 岡潔……数学者(一九〇一〜一九七八)。

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(4)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(5)「絶えず世界を魔術化しながら、生きている」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 世界を自分の都合に合わせて解釈し、外的刺激までも自分の想像力の産物と思い込みながら生きている。
- B 近代的科学に基づいて世界を合理的に解釈するのではなく、魔術的な想像力で解釈しながら生きている。
- C 知識とか想像力といったその人しか持てないものを現実の世界の中に投影させながら生きている。
- D 自らの想像力を働かせて、現実の世界と空想的な別の世界のふたつを内面に共存させながら生きている。
- E 自分の経験と想像力に基づいて世界を見て、その世界だけが真実の世界であると主張しながら生きている。

〔問三〕 傍線(6)「世界中の大部分の人は十進法を使う」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 十進法が広がっていたため、世界の人々と商売などで交流するときにもっとも容易だったから。
- B 特別な根拠はなかったものの、十進法が数学の世界で使われて学問的に広がっていたから。
- C 計算には十本の指を使うのが便利なので、十進法を使うことで数学の進歩が容易になったから。
- D 十進法は他の計算方法と同様に偶然の産物だが、文明が進歩した地域で使用されていたから。
- E 身体を使って数を扱う人間にとって、十進法がたまたま運用上、もっとも都合がよかったから。

〔問四〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人が生きている上で経験したことを蓄積する器官であるとともに、新たな世界を創造する器官でもある
- B 人が経験する世界の一つの原因であるとともに、人が様々に世界を経験してきたことの帰結でもある
- C 環境世界と人間を結ぶ器官であるだけでなく、環境世界の悪影響を排除する大事な役割も果たしている
- D それ独自の発展をしてきたと同時に、身体の他の部位の働きによって絶えず変容させられてきている
- E 環境世界で生きるためにもっとも必要な行為を経験を積む前から選択し、自律的に実行に移ってきている

〔問五〕 傍線(8)「自分の幻肢に感じる」とあるが、その原因としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ハンフリーのミラーニューロンが正常に作用しなかったため、無効信号が伝達されなかったため。
- B ハンフリーのミラーニューロンは正常に作動したが、腕がないので無効信号が強力に働いたため。
- C ハンフリーのミラーニューロンが無効信号のために正常な作動を妨げられてしまったため。
- D ハンフリーのミラーニューロンが無効信号よりも強力に作用したため、信号が作動しなくなったため。
- E ハンフリーのミラーニューロンは正常に活性化されたが、それを打ち消す無効信号がなかったため。

〔問六〕 筆者は数学という学問をどのようなものと考えているのか、「数学」、「身体」、「脳」、「社会」という語句をすべて用いて五十字以内で書きなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 人間の生きている世界は環世界と呼ぶべきものであるが、マグニにとっても同様に環世界が存在している。
- イ 数直線は数と位置を結びつける大胆な発想だが、脳における両者の密接さのため無理なく受け入れられる。
- ウ 人間は新たな課題に直面した際に手持ちの道具や身体で対応したため、課題の真の解決が遅れてしまった。
- エ 人間の身体の特異な条件に適合するように作られているという点においては、はさみも十進法も同じである。
- オ 目の前の人が痛い目にあうと自分も痛さを感じるのは、共感する能力を人が自然に学んできたからである。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

アメリカの法学者キャス・サンステイーンは、インターネットを中心とした情報通信技術の発達が民主主義の基盤を危うくする可能性について警鐘を鳴らしている。

民主主義とは単に多数決で物事を決定することではなく、共通の知識や問題関心の上に立って討議することにより合意を生みだしていくことである。そのためには、人びとは時には特別に興味を持っていない話題や視点にも触れる必要があるのだが、インターネット上では自分が興味を持つ情報だけを選別し、接触するフィルタリングの技術が発達してきている。

もちろん、インターネット自体は多くのの人にとって視野を広げる機会となり、新しい話題や考えとの出会いを可能とする面も持つ。しかし、それでもインターネットは考えの似た者同士の交流を容易にすることによって、集団分極化へのリスクを高めているというのだ。集団分極化とは(1)を指すのだが、インターネットは同じような考え方の人間を集めやすいため、そのなかでの議論を通じて、人びとはより過激な立場をとるようになる。なぜなら、同じような考え方をする人たち同士が気軽に頻りに話し合い、反対意見を聞く機会があまりなくなるためである。

また、その過程には、カスケード(小さな滝、わかれ滝)という現象も関わる。ほとんどの人は重大な事柄について直接的なあるいは確かな情報を持ち合わせていないがゆえに、他人からの情報に頼らざるをえない。よく知らないことであれば、何人がある意見を支持していると聞かされると、支持するようになる。支持者が増えれば、そのことが信頼性を担保するものとなり、ますます多くの人に受け入れられるようになる。このように情報——正確なものでもよいし、虚偽でもよい——が一斉に広まっていく過程を、サンステイーンはカスケードとして捉えている(『インターネットは民主主義の敵か』)。

人びとが知らないところで巨大な権力が世界を動かしているといった陰謀論は、このようなインターネット・コミュニケーションの特徴によって流行しているものの一つであろう。陰謀論をもっともらしく思う人にとっては、インターネットでは「**事実**」に接触でき、同じ「**事実**」を共有する多くの仲間に出会うことができる。このような状況は日常生活のなかではあまりない。

そして、インターネット上の仲間内の議論は、より極端な方向へと展開する。一方、陰謀論を信じない人にとっては、虚偽やうわさ、デマを広める陰謀論のサイトが増殖し、極端になっていくように見える。インターネット上は荒唐無稽な話が多いという印象を持つ。

インターネットがうわさの巣窟とされるのは、単に情報が多いからというわけではなく、また事実関係のあやふやな情報が多いからというわけでもない。それだけでなく、むしろ、特定の立場からの「情報」が集まることで増殖するところにある。

ただし、サンステインが述べる集団分極化やカスケードはインターネット上で起こる現象ではない。集団分極化は「リスキーシフト」、あるいはその逆の「コーシャスシフト」として、社会心理学で取り上げられてきたトピックスの一つである。リスキーシフトは一人ひとりの個人より集団による意思決定がより過激なものとなることを指すものであり、たとえば「赤信号みんなで渡れば怖くない」といった言動がこれに当たる。コーシャスシフトはその逆で、集団での意思決定が安全志向になることである。

しかし、集団分極化やカスケードがインターネット上で起こりやすいとするならば、それはやりとりが保存され、公開されているためであらう。

日常生活のなかでは知り合うことができる人が限られているだけでなく、対面での会話は基本的にその場限りで消えていく。あるテーマについて話をする場合、その場に居合わせる必要がある。

これに対してインターネット上には、多種多様な情報と多種多様な人とコミュニケーションする場が常に開かれている。このため、日常生活では接する機会の少ない意見や立場にも接触でき、自分の都合に合わせて議論に参加することができる。ゆえに時空間を超えて考えが似た者同士が集まりやすく、そのなかで議論が繰り返されることによって、集団分極化が促進される可能性がある。

また、インターネットでは周囲の状況も見えやすい。正確には、⁽⁴⁾個人が見たいと望む「周囲の状況」を見ることが可能である。日常生活のなかでは、周囲の人たちがあるテーマについてどのような考えを持っているのか、把握することは容易ではない。友

達と一対一で、あるいは集団で話をするなかで、周囲の人たちのあいだでどんな情報や考え方が当たり前とされているのか、あるいは、自分が持っている考えは少数派とみなされているかなどの推測はできるのだが、実際に多くの人に考えを聞く機会はなかなかない。

一方、インターネット上では個人が望む立場を支持する情報に数多く接することができる。検索をして、あるいはリンクをたどって特定の立場からの情報に接するうちに、それが多数派であると誤認する。インターネット上の多数の情報のおかげで、自分もつともらしいと思う情報を支持する人を見つけることのほうが、反対派を見つけるよりはるかに容易である。

このように考えるならば、インターネットの公開性は集団分極化やカスケードを促進することで、立場を同じくしない人からは「うわさにみえるもの」を増殖させることとなる。もつとも、サンステイーンの議論には批判も多く、インターネット利用者は選択的に自分の見たい情報だけに接触するのではないという実証的な研究結果もある。インターネット利用がより日常化するなかで、インターネットの持つ技術的な可能性ではなく、人びとが実際にどのように情報に接触するようになるのか引き続き検討が必要であろう。

(松田美佐『うわさとは何か』による)

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ある集団がそれと対立する意見との理論闘争のなかで先鋭化し、極端な立場をとるようになること
- B 集団で議論することにより、メンバーがもつとも持っている主張より極端な立場へシフトすること
- C さまざまな考え方のなかから自分の考えに最も近いものを探し出し、そこに集まり、閉鎖的になること
- D インターネットが反対意見を持つ者との対立を鮮明にしたため、議論が攻撃的になりやすくなること
- E 同じような考え方の者が集まるなかで、より過激な意見を持つものが主導権をとり、支配していくこと

〔問二〕 傍線(2)「事実」を言いかえたものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 陰謀論
- B 虚偽やうわさ
- C 荒唐無稽な話
- D 事実関係のあやふやな情報
- E 特定の立場からの情報

〔問三〕 傍線(3)「やりとりが保存され、公開されている」とあるが、それはどのような効果をもたらすのか。適当なものを左の中から三つ選び、符号で答えなさい。

- A 距離を超えて多くの人と知り合うことができ、自分の考えを広く世界に向けて述べることができる。
- B 非論理的な意見は徹底的に批判され、取り下げざるをえなくなり、自然に淘汰される。
- C 世の中では少数派である意見も差別されることなく保存され、消されることがない。
- D 厳しい議論が繰り返され、多くの支持を得た意見のみが残ることを許されていく。
- E 議論のために同時に参加する必要がなく、自分の都合に合わせて参加できる。

〔問四〕 傍線(4)「個人が見たいと望む「周囲の状況」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 多くの情報を比較することで誤った情報は的確に否定され、正しい情報を支持する人が多くいること
- B 人びとがインターネットによって視野を広げることができるので、極端な意見は少ないこと
- C インターネット上では自分と同じように考える人が多くおり、反対の意見は少なく思えること
- D 多くの人の知恵が結集されることにより、自分とは反対の意見が見事に論破されていること
- E 時間と空間の制限を超え、多様な集団が十分に議論し合う場が開かれていて、安心させられること

〔問五〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア インターネットの発達は、社会的な議論をいたずらに混乱させ、「うわさ」を増幅させているので、「フィルタリング」の技術をより発達させる必要がある。

イ カスケードとは、議論の中で意見が細かく分かれ、とりうる立場が増えていくことである。

ウ 情報伝達技術の発達によって今後どのような可能性が広がるかということも重要な問題だが、人と情報の関わりのある方がさらに研究されねばならない。

エ インターネットによって起こる議論のあり方は、以前から見られた現象の単なる量的拡大に過ぎない。

オ インターネットが発達したことによってわかったことの一つは、情報が多すぎると人は自分の意見を見失いがちになるということである。

三 次の文章は『太平記』の一節である。四条しじょうなむつ畷の合戦で楠くすのきまなづ正行の軍勢が奇襲をかけ、宿敵高師直こうしちくをまさに討ち取ろうとした場面である。これを読んで後の間に答えなさい。(30点)

すでに楠と武蔵守と、あはひわづかに半町ばかりを隔てたれば、すはや楠が多年の本望ここに遂げぬと見えたところに、上山六郎左衛門、師直の前に馳せ塞がり、大音声(2)を挙げて申しけるは、「八幡殿より以来、源家累代の執権として、武功天下に顕れたる高の武蔵守師直これにあり」と名乗つて、討ち死にしけるその間に、師直はるかに隔たつて、楠本意を遂げざりけり。

そもそも多勢の中に、上山一人師直が命に代はつて、討ち死にしける所存何事ぞと尋ぬれば、ただ一言の情を感じて、命を軽くしけるとぞ聞こえし。ただ今、楠この陣へ寄すべしとは思ひ寄らず、上山しづかに物語せむとて、執事の陣へ行きけるところに、東西南北騒ぎ色めきて、敵寄せたりと打ち立ちける間、上山わが屋に帰り、物具せむ逗留無かりければ、師直が着背長の料(4)に、同じ毛の鎧を二両まで置きたりけるを、上山走り寄りて、唐櫃(5)の緒を引き切りて鎧を取りて肩に打ち懸けけるを、武蔵守が若党、鎧の袖をひかへて、「これはいかなる御事候ふぞ。執事の御着背長にて候ふものを。案内をも申され候はで」と言ひて、奪ひ止めむと引き合ひける時、師直これを聞きて馬より飛んで下り、若党をはたと睨んで、「いふかひなき者の振舞かな。ただいま師直が命に代はらむ人々に、たとひ千両万両の鎧なりとも、何か惜しかるべきぞ。ここ退け」と制して、「いしうも召されて候ふものかな」と、かへつて上山を感じせられければ、上山まことにうれしき気色にて、この言葉の情を思ひ入りたるその心地言はねども色に現れたり。

されば事の儀を知らずして鎧を惜しみつる若党は、軍の難儀なるを見てまづ一番に落ちけれども、情を感じずる上山は、師直がその命に代はつて討ち死にしけるぞあはれなる。いにしへも今も大将たらむ人は、皆罰をば軽く行ひなだめ、賞をば厚く与へしむ。もし昔の穆公馬を惜しみたまはば、大敵の囲みを出でたまはむや。今の師直鎧を与へずは、上山命に代はらむや。情は人の為ならずとは、かやうのことをぞ申すべき。

注 半町ばかり……五〇メートル程度。

八幡殿……源義家。

執事……高師直。

逗留……時間。

着背長……大

將が着用する大鎧。 　いしう……ご立派に。 　穆公……秦の穆公。 　飢えた兵士たちが穆公の馬を食べて罪に問われたが、穆公は許した。 　後に晋軍に包囲されたが、彼らの奮闘で包囲を突破した。

〔問一〕

傍線(1)(6)(8)(9)の活用形としてもつとも適当なものをそれぞれA～Fの中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 未然形

B 連用形

C 終止形

D 連体形

E 已然形

F 命令形

〔問二〕

傍線(2)「大音声を挙げて申しける」とあるが、上山がそのようにした理由としてもつとも適当なものをA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

A 楠の奇襲を受けて味方の軍勢が逃げ出そうとするのが、どうしても許せなかったから。

B 敬愛する執事が敗北の憂き目を見るのが耐えがたく、その功績を世に伝えたかったから。

C 大将たる執事が逃げようとするに耐えられず、自覚と責任を思い出させようとしたから。

D どうせ負けて死ぬ運命にあるのなら、せめて一軍の大将の振りをして死にたかったから。

E 自分の気持ちを理解してくれた執事を逃がすために、身代わりになろうと思ったから。

〔問三〕 傍線(3)(4)(5)(7)の解釈としてもっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(3) 情を感じて

- A 情趣に共感して
B 思いやりに感動して
C 憐れみに気がついて
D 深意を理解して

(4) しづかに物語せむ

- A 執事がなごやかにお話するだろう
B 執事にひそかに内心をうちあけよう
C 執事とのんびりとおしゃべりしよう
D 執事にこっそりと危機を報告しよう

(5) 案内をも申され候はで

- A 着用する許可も申請なさらないで
B ご連絡もいただいていないのに
C 取次に事情説明も言われていないのに
D わたしに断りもなさらないで

(7) 何か惜しかるべきぞ

- A 何か惜しいのか
B 何が惜しいだろうか
C 何を惜しんでいるのか
D 何とも惜しいにちがいない

〔問四〕 傍線部(10)「情は人の為ならず」とはどのような意味か、その説明としてもっとも適当なものをA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A 人に情をかけないことは、実はその人を思うからである。
- B 人に愛情をもつことは、かえって自分自身を愛することになる。
- C 人に人情をかけることは、結果的にその人のためにならない。
- D 人に恩情を与えることは、結局は自分自身の利益となる。
- E 人になんらかの感情をもつことは、必ずその人の身を滅ぼす。